様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 １８ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００５７４

研究課題名（和文）役割語・キャラクター言語の翻訳可能性・翻訳手法についての研究

研究課題名（英文）Research on translatability and translation methods of role language and character language

研究代表者
金水　敏（KINSUI, Satoshi）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：７０１５３２６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語と他言語の間におけるフィクションの翻訳の技法について、個別の作品の分析を通じて一般化を試みることを目標として、主として村上春樹の長編小説作品を取り上げた。具体的には、村上作品に現れる方言、特定語彙、特定の登場人物の話し方とその英語訳・中国語訳の実態等について調査した。
また研究の基盤となる「キャラクター」の理論的考察についても考察を進めた。結論として、《キャラクター》を人物の属性全般とし、その一部の言語的特徴として役割語・キャラクター言語が位置付けられること、属性である《キャラクター》と、唯一性を担う《人格》が一体となってインディビジュアルを形成することなどを提案した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
アニメ、マンガや村上春樹の小説等は、日本が世界に誇る文化資源であるが、これらの作品には役割語がふんだんに用いられていて、作品の魅力の一部をなしている。しかし日本語の役割語の他言語への翻訳は、一般的に極めて困難であることが本研究によって明らかとなった。では、役割語を直接翻訳することに代わる手段をどのように探るべきか。この点について本研究は、キャラクターがフィクションを読み解く際にどのような機能を果たすかという原理的な考察を深めることによって、その可能性を示すことができると考え、その方向性を提示することに成功した。

研究成果の概要（英文）：This study focused mainly on Haruki Murakami's full-length novels, with the goal of attempting to generalize the techniques of fiction translation between Japanese and other languages through analysis of individual works. Specifically, we investigated the dialects that appear in Murakami's works, specific vocabulary, the speech patterns of specific characters, and the actual conditions of their English and Chinese translations.
We also examined the theoretical consideration of "character" as the basis of our research. In conclusion, we proposed that "character" is an attribute of a person in general, that role words and character language are positioned as part of the linguistic characteristics of "character," and that "character," an attribute, and "personality," which carries uniqueness, are united to form an “individual."

研究分野：言語学、日本語学、役割語研究、キャラクター研究

キーワード：役割語　翻訳　キャラクター　日本語　フィクション　村上春樹　ジブリアニメ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1) 役割語研究の進展：キャラクター言語の提唱

金水 (2000; 2003) で提唱された「役割語」の概念は、さまざまな作品において検証され、ケーススタディが重ねられるとともに、理論的深化が図られた。金水 (2003) におけるその定義は

> ある特定の言葉遣い（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉遣いを思い浮かべることができるとき、その言葉遣いを「役割語」と呼ぶ。
>
> （金水 2003, 205 頁）

というものであった。これはかなり広い定義になっているが、〈老人語〉〈女ことば〉〈男ことば〉等のようにラベリングされる代表的な役割語は概ね、特定の話者グループのステレオタイプの話し方を写すものであることに鑑み、役割語の定義にこの「特定の社会的・文化的な話者グループの話し方と対応し、かつその知識が言語コミュニティで広く共有されている」ものという点を盛り込み、このような性質を持つ発話スタイルのみを役割語と呼ぶことにした一方で、フィクションにおけるあらゆるキャラクターの発話スタイルを「キャラクター言語」と呼ぶこととし、キャラクター言語の部分集合が役割語であると規定した。(Kinsui & Yamakido 2015; 金水 2016)。キャラクター言語の中で役割語と呼べないものには、例えば次のようなパターンが考えられる。

(i)
- a. 特定の社会的・文化的グループとの結びつきが認められるが、未だ言語共同体の中で「役割語」として広く認知されているとは言いがたい話し方。
- b. 既に存在する役割語の用法をずらして、本来の社会的・文化的グループには属さないキャラクターに適用されている話し方。
- c. 役割語の一種とも見られるが、当該の社会的・文化的グループのステレオタイプの表現というよりは、話し手の個性の表現として用いられている話し方。
- d. いかなる社会的・文化的グループにも対応しないが、キャラクターの物語上の役割から割り当てられた特殊な話し方。

（金水 2016: 7-8）

この定義の変更によって、社会的なステレオタイプの背景の有無に寄らず、フィクションの登場人物の話し方を研究対象として取り扱えるようになった。

なお、2015 年 4 月より年数回の頻度で「役割語研究会」を開催しており、役割語に関連する最新の研究成果を関心のある研究者とともに共有できる体制が整っていた。

(2) *Virtual Japanese: Enigmas of Role Language*　（『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』の英訳）

役割語研究に対する海外の反響に答えるために、外部資金を使って金水 (2003) 『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』の英訳を実行した（Kinsui 2017）。多くの用例を英訳する経験を通じて、役割語の翻訳の（不）可能性について考察するモチベーションを得た。

(3) 村上春樹翻訳調査プロジェクトの発足

役割語・キャラクター言語の翻訳における、主たる研究対象として、村上春樹の作品を選択した。これは、50 余りの国・地域の言語に翻訳されていて、海外の研究者や留学生らとの共同研究を起こすのに最適の資料群だからである。そこで 2017 年に、村上春樹翻訳調査プロジェクトを立ち上げ、研究者・学生に広く参加を呼びかけた。さっそく同年、大阪大学の留学生らとともに社会言語科学会でワークショップを実施した。その成果に加え、内外の研究者の寄稿を得て、2018 年 3 月に『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書（１）』を刊行した。以来、この報告書は 2022 年 3 月まで毎年刊行を続けており、すべて大阪大学リポジトリで公開されている。

このプロジェクトの成果は、2017 年以来、台湾・淡江大学村上春樹研究センターが主催する「村上春樹国際シンポジウム」でも招待講演や研究発表の形で公開している。

２．研究の目的

本研究では、主にフィクションにおいて日本語から他言語へ、他言語から日本語へと発話が翻訳される事例から、典型的なパターンを抽出・分析し、どのような場合に役割語やキャラクター描写の発話の表現が生かされ、また逆に無視あるいは削除、逆に増幅されるかという点について整理する。役割語・キャラクター言語がそのまま生かされない場合は、代替手段としてどのような技法が用いられているかという問題も併せて見ていく。以下、やや詳しく説明する。

(1) 役割語・キャラクター言語の翻訳の実態調査

日本語で書かれたフィクション作品が外国語に翻訳される際に、また逆に外国語によるフィクション作品が日本語に翻訳される際に、登場人物の発話がどのように扱われているかという点について実態調査を行うことである。その際、特に日本語の原作におけるキャラクター言語（役割語の表現を含む）が翻訳語にどのように処理されたかという点に着目する。すなわちこれは、キャラクターがどのように翻訳（不）可能か、という問題を考えることである。この点については、以下のような予測が立てられる。

まず日本語から外国語へと翻訳される場合、多くのキャラクター言語の表現は翻訳語には失われる（無視される）ことが最も多いと考えられる。なぜなら一部の言語を除いて、日本語ほど役割語的な表現が豊富で、フィクション作品に生かされている言語は見当たらないからである。また一般的に、ソース言語（翻訳元の言語）の言語変異を翻訳することの難しさ、問題点が指摘されている（Nida 1972; Yau 2014; Colina 2015）ことにも注意しておく必要がある。

次に外国語から日本語に翻訳される場合は、逆のことが起こる。ソース言語では特段の特徴のないスタイルが用いられていたとしても、ターゲット言語（翻訳先の言語）である日本語では、適切な役割語を付与しないと不自然な、ぎこちない翻訳になってしまう場合がある。

これらの予測を立てながら、実際のデータに当たってケーススタディを積み重ね、有益な一般化を探ることとなる。

(2) 代替手段の実態調査

日本語から他言語への翻訳の場合も、他言語から日本語への翻訳の場合も、ソース言語の特定のスタイルからターゲット言語への特定のスタイルへの単純な変換のみではキャラクターの翻訳として不十分である場合、どのような代替手段があり得るかという点についても併せて探求することとする。その手段とは言語内の表現である場合もあれば、言語外の表現となる場合もあるだろう。

(3) 理論的基盤の構築

上記 (1)-(2) について考察するためには、登場人物のキャラクターをいかに正確に捉えるかということが重要であり、そのためには、基盤となるキャラクターについての理論が必要である。もし既存の理論で不十分であれば、時前で理論的枠組みを構築しなければならい。

３．研究の方法

(1) 対訳データの収集

今回の計画では、組織的なデータとして村上春樹の小説作品とその翻訳を対象とする。ターゲット言語としては、英語および中国語（簡体字訳、繁体字訳）を選択する。これは英語版と中国語版が最も入手しやすく、また申請者（と協力者）にとって扱いやすいという利点があるからである。村上作品の中では、1979 年から 2000 年までの作品と、『海辺のカフカ』(2002)、『1Q84』(2009-2010)、『騎士団長殺し』(2017) を中心的に取り扱うこととした。

(2) さまざまな作品の翻訳例の検討

他言語から日本語への翻訳作品については、小説に限らず、映画、インタビューなど幅広く収集して考察することとした。例えば VOGUE 誌における Billie Eilish のインタビューの翻訳記事を通じて〈女ことば〉の付与の有無について調べるなどした。

(3) キャラクター論の収集と検討

キャラクタ（ー）を言語の面から最も精力的に研究した業績として、定延 (2011; 2020)が挙げられる。そこで本研究では、定延氏の研究を読み込んでその成果を批判的に吸収することに努める。その際に、Brewer (1988)、宮本 (2003)、斎藤 (2011)、伊藤 (2005) 等の基本文献も参照する。

４．研究成果

(1) 村上春樹作品における関西方言の（不）使用

村上春樹作品には方言の使用が極めて少ないが、その中でも関西方言は一定数の用例を見いだすことができる。このことは、村上春樹が関西の出身で、元来関西弁話者であったことと関係がある。どのような作品に、どのような狙いで関西方言が用いられているかということは、彼の小説におけるスタイル変種の使い分けの狙いと、使用者のキャラクターを分析するという点で重要と考えられる。単にステレオタイプな関西人キャラの表現として用いられているらしい用例もあるが、そればかりとは言えない、複雑なキャラクター造形と関西弁が結び付いている例もある。例えばそれは、故郷を捨てて来た人間の標識として用いられていたり、故郷でもないのに関西弁を用いる人間であったりと、ある種の距離感の指標として関西方言が用いられる点に着目される。

また、初期作品の舞台が関西の芦屋市であるにも関わらず、人工的な翻訳的な話体が用いられている点は、故郷としての関西色を消し去ろうとする狙いがあったと見られる。関西弁の使用が阪神淡路大震災のあった 1995 年以降に集中することと併せて、村上春樹自身の故郷と父に対する思いや距離感がこれらのデータから読み取れると考える（金水 2021a)。これらの関西弁をど

のように翻訳するかという点については、山木戸浩子氏の研究がある（山木戸 2022）。

(2) 『騎士団長殺し』で使用される「あらない」の起源

『騎士団長殺し』に登場する「騎士団長」は、「ない」の代わりに「あらない」を用い、また人称単数として「諸君」を用いる等、得意なキャラクター言語を話す。騎士団長のキャラクターを考える上で、「あらない」がどのように着想されたかという点を知ることは重要である。

日本語史資料から見た場合、西日本系の古語では「あらず」のように「あり」と否定の助動詞が結合することはあり得たが、近世以降は西日本系でも東日本系でも、「ある」に否定辞が直接不可されることはまれとなって、資料でもごくわずかしか見当たらない。村上春樹氏がそのようなまれな日本語史資料に触れたとは考えにくいので、騎士団長の特異なキャラクターを強調するために、人為的に合成された語法であろうと考える（金水 2020）。

(3) 『騎士団長殺し』に登場する「騎士団長」のキャラクター、発話スタイルと翻訳

上記のように騎士団長が奇妙な話し方をするのは、騎士団長がモーツァルトの歌劇の登場人物、飛鳥時代の貴族、即身仏（ミイラ）等複数の人物像が重ね合わせられている上に、その本質は「イデア」の化身であるという奇妙な成りたちを言語の上から表現するためと考えられる。騎士団長の話し方について英語と中国語訳を調査したところ、次のようなことが分かった。

英訳では、「あらない」の直訳は放棄されているが、その代わりというべきか、yes/no に当たる表現として affirmative/negative という表現が用いられている箇所がある。これはアメリカの軍隊や航空界で用いられる表現で、おそらくは騎士団長の軍人としての側面から考え出された表現であろうと推測する。また「諸君」に関しては my friends という表現が用いられているが、英語の my friends は三人称複数であり、本来の人称とは合わない。そこで、常時 my friends を用いるのではなく、you も随時混ぜて使いながら、文脈の理解を助けるという方法が採られている。この方法は山木戸（2019）で指摘された、『海辺のカフカ』のナカタ老人が自分自身を指し示す「ナカタ」を翻訳するに当たって、Nakata と I を混ぜて用いるという方法と平行的である。

中国語訳では、繁体字訳も簡体字訳も「諸君」を「諸君」として訳しているが、これは漢語を共有している日本語と中国ゆえの利点と言える。ただし現代中国語では「諸君」は現代の日常語彙ではなく、その点で騎士団長の話し方の奇妙さは伝わるようである。一方、「あらない」に関しては、繁体字訳では基本的に無視されているが、簡体字訳では、すべてではないが文法的に無理のない範囲で、「无有」という人工的な訳語が採用されている。

このように、騎士団長殺しの話し方は特異ではあるが、否定表現その他の特徴から〈老人語〉の印象を与えることも一方で確かめられる。これは物語における騎士団長の“メンター”としての機能から考えて、妥当なキャラクター付けであると評価できる（金水 2022b）。

(4) 《キャラクター》、《人格》、インディビジュアル（登場人物）の理論的整理

申請者は、定延（2011; 2020）における「スタイル／キャラ／人格」という概念の使い分けを参照しつつ、これとは異なる観点から、登場人物（インディビジュアル）を《キャラクター》と《人格》に分離するという着想を得た。《キャラクター》は人物の可搬的かつ複製可能な属性全般を指し示す一方で、《人格》は人物の唯一性そのものであり、またその唯一性は読み手（受け手）が自己同一化を行うことで付与されると考えるのである。

読み手の自己同一化の度合い、また在り方から、物語の登場人物はクラス 1、クラス 2、クラス 3 に大きく 3 分類できる。クラス 1 は主役級の人物であり、読み手の自己同一化の度合いが最も深い。クラス 2 は重要な脇役で、クラス 1 の人物に二人称的に対峙する人物を典型とする。クラス 3 は名前も与えられないその他大勢の人物である。《キャラクター》は、出自である“世界”と、身体的属性、社会的属性、行動的属性、心的属性という観点から概ね記述できる。ただしこれらの属性は独立変数ではなく、連動していることが多い。例えば性（gender）は身体的属性、社会的属性、行動的属性、心的属性のすべてに関わる要素であり、それらの属性間で性の一致や不一致・ずれ等が規定できる。キャラクター言語（役割語を含む）は社会的属性に大きく制約を受ける行動的属性の一部と見ることができる（身体的属性とも関わる）。

《人格》はインディビジュアルの唯一性を保証することが唯一の機能であるが、その人物の感情、思考、記憶、願望、欲望等は《人格》に紐付けられると考えられる（金水 2021b）。

また《人格》は属性としての肉体から切り離して捉えることが容易であり、そのようにして取り出された《人格》が幽霊、幽体離脱、生き霊、生まれ変わり、憑依等の“霊的事象”と結び付けられると考えられる（金水 2022a）。

(5) その他

日本語特有の現象として、文字種（漢字・平仮名・片仮名・英字）の書き分けによるキャラクターの表現が着目されている。松田（2019; 2020; 2022）等で精力的に論が展開されているが、金水（2021c）では、『海辺のカフカ』その他の事例を挙げてこの問題を扱った。

参照文献

Brewer, M. B. (1988) "A dual process model of impression formation," T. K. Srull and R. S. Wyer, Jr. (eds.) *Advances in Social Cognition*, Vol. 1, pp. 1-36, New York: Academic Press.
Colina, S. (2015) *Fundamentals of translation*, Cambridge University Press, Cambridge.
伊藤　剛（2005）『テヅカ・イズ・デッド ひらかれたマンガ表現論へ』NTT 出版.
金水　敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』もっと知りたい！ 日本語，7,岩波書店.

金水　敏（2016）「役割語とキャラクター言語」金水　敏（編著）『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ 2015 報告論集」pp. 5-13，私家版.
金水　敏（2020）「村上春樹作品と日本語史の「共鳴」－『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考－（増補版）」金水　敏（編著）『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(3)』pp. 39-47，大阪大学.
金水　敏（2021a）「村上春樹と関西方言について―遠心的／求心的な移動とポリフォニー―」金水　敏（編著）『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(4)』pp. 79-90，大阪大学.
金水　敏（2021b）「第一章 《キャラクター》と《人格》について」荒木浩・前川志織・木場貴俊（編）『〈キャラクター〉の大衆文化　伝承・芸能・世界』pp. 31-54，KADOKAWA.
金水　敏（2021c）「近・現代小説の片仮名の用法一斑–村上春樹『海辺のカフカ』を中心に–」加藤茂博・岡墻裕剛（編）『日本語文字論の挑戦–表記・文字・文献を考えるための 17 章–』pp. 26-58，勉誠出版.
金水　敏（2022a）「《キャラクター》と《人格》の観点からフィクションを読むー『海辺のカフカ』を例としてー」『国語と国文学』99-1: 3-19，東京大学国語国文学会（編）明治書院（発行）.
金水　敏（2022b）「村上春樹の小説における《人格》と《キャラクター》の逸脱―『騎士団長殺し』とその翻訳を中心に―」金水　敏（編著）『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(5)』pp. 63-81.
Kinsui, Satoshi (2017) *Virtual Japanese: Enigmas of Role Language*, 大阪大学出版会.
Kinsui, Satoshi and Yamakido, Hiroko (2015) “Role Language and Character Language,” *Acta Linguistica Asiatica* 5-2: 29-41, Ljubljana: Ljubljana University Press, Faculty of Arts.
宮本大人（2003）「漫画においてキャラクターが「立つ」とはどういうことか」『日本児童文学』2003，3-4 月号，pp. 46-52.
Nida, E. A. (1975) “Varieties of language,” *Language structure and translation: Essays by Eugene A. Nida,* Stanford University Press Stanford. (Original work published 1972)
定延利之（2011）『日本語社会 のぞきキャラくり–顔つき・カラダつき・ことばつき』三省堂.
定延利之（2020）『コミュニケーションと言語におけるキャラ』三省堂.
斎藤　環（2011）『キャラクター精神分析-マンガ・文学・日本人-』筑摩書房.
Yau, W.-P. (2014) “Translation and film: Dubbing, subtitling, adaptation, and remaking,” S. Bermann, & C. Porter (Eds.), A Companion to Translation Studies, pp. 492-503, Wiley Blackwell, Chichester.
山木戸浩子（2019）「ナカタさん（『海辺のカフカ』）の変わった話し方は英語でどのように翻訳されるのか」金水　敏（編著）（2019a）『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(2)』pp. 18-50，大阪大学.
山木戸浩子（2022）「村上春樹作品における関西弁は英語でどのように翻訳されるのか」金水　敏（編著）（2022a）『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(5)』 pp. 1-24，大阪大学.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 金水　敏	４．巻 -
２．論文標題 村上春樹と関西方言について：遠心的／求心的な移動とポリフォニー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 村上春樹における移動	６．最初と最後の頁 23-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金水敏・劉翔	４．巻 5
２．論文標題 中国・抗日作品のメディアミックスと日本人表象：『鶏毛信』を例に	５．発行年 2020年
３．雑誌名 メディアとことば	６．最初と最後の頁 98-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金水　敏	４．巻 40-1
２．論文標題 ポピュラーカルチャーのことば	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本語学	６．最初と最後の頁 4-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 金水　敏	４．巻 -
２．論文標題 近・現代小説の片仮名の用法一斑：村上春樹『海辺のカフカ』を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 日本語文字論の挑戦：表記・文字・文献を考えるための17章	６．最初と最後の頁 26-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金水　敏	4．巻 7
2．論文標題 アニメキャラクターの言葉	5．発行年 2019年
3．雑誌名 田中牧郎（編）『現代の語彙：男女平等の時代』	6．最初と最後の頁 72-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金水　敏	4．巻 （なし）
2．論文標題 村上春樹作品と日本語史の共鳴：『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考	5．発行年 2019年
3．雑誌名 『村上春樹における共鳴』	6．最初と最後の頁 29-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金水　敏	4．巻 -
2．論文標題 第一章 《キャラクター》と《人格》について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 〈キャラクター〉の大衆文化　伝承・芸能・世界	6．最初と最後の頁 31-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金水　敏	4．巻 99-1
2．論文標題 《キャラクター》と《人格》の観点からフィクションを読む：『海辺のカフカ』を例として	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国語と国文学	6．最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金水　敏	4．巻 -
2．論文標題 ポライトネスとキャラクター	5．発行年 2022年
3．雑誌名 敬語の文法と語用論	6．最初と最後の頁 342-358
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金水　敏	4．巻 3
2．論文標題 村上春樹作品と日本語史の「共鳴」:『騎士団長殺し』騎士団長の「あらない」再考（増補版）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書	6．最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/73835	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 金水　敏	4．巻 4
2．論文標題 村上春樹と関西方言について：遠心的／求心的な移動とポリフォニー（修正版）	5．発行年 2021年
3．雑誌名 村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書	6．最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/79003	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 金水　敏	4．巻 5
2．論文標題 村上春樹の小説における《人格》と《キャラクター》の逸脱:『騎士団長殺し』とその翻訳を中心に（修正版）	5．発行年 2022年
3．雑誌名 村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書	6．最初と最後の頁 63-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18910/86387	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　8件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 金水　敏
2．発表標題 キャラクターと「人格」について：主にテキストにおける
3．学会等名 役割語研究会（国際学会）
4．発表年 2020年

1．発表者名 劉翔・金水　敏
2．発表標題 中国・抗日作品のメディアミックスと日本人表象：『鶏毛信』のさらなる発展もふまえて
3．学会等名 メディアとことば研究会（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 金水　敏
2．発表標題 村上春樹と方言について：登場人物・作家の移動と痕跡
3．学会等名 第8回村上春樹国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 金水　敏
2．発表標題 フィクションの話し言葉を考える：役割語を軸として
3．学会等名 安田女子大学　日本文学会学術講演会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 金水　敏
２．発表標題 日本語ポップカルチャー作品の言語の特徴:ジブリアニメを例に
３．学会等名 明治大学国際日本学研究科　特別講義（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 KINSUI Satoshi
２．発表標題 Speech Style of the Commendatore in Haruki Murakami's Killing Commendatore and its English Translation
３．学会等名 Japanese Language in Fiction（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 金水　敏
２．発表標題 村上春樹の小説における《人格》と《キャラクター》の逸脱：『騎士団長殺し』とその翻訳を中心に
３．学会等名 第10回村上春樹国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 金水　敏
２．発表標題 キャラクターを翻訳する：村上春樹作品を中心に
３．学会等名 日本通訳翻訳フォーラム2021（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 金水　敏
２．発表標題 《人格》、《キャラクター》と“霊的事象”：『千と千尋の神隠し』『海辺のカフカ』を例に
３．学会等名 役割語研究会（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 金水　敏
２．発表標題 フィクションにおけるキャラクターと言語について
３．学会等名 駿河台大学総合研究所シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 金水　敏
２．発表標題 翻訳におけるジェンダー・バイアスを克服することは可能か
３．学会等名 日本通訳翻訳学会関東支部例会（招待講演）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

１．著者名 金水　敏（編）	４．発行年 2020年
２．出版社 大阪大学	５．総ページ数 54
３．書名 村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(3)	

１．著者名 金水　敏（編）	４．発行年 2021年
２．出版社 大阪大学	５．総ページ数 95
３．書名 村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(4)	

１．著者名 金水　敏（編）	４．発行年 2022年
２．出版社 大阪大学	５．総ページ数 90
３．書名 村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(5)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	山木戸　浩子 (YAMAKIDO Hiroko)		
研究協力者	イーヴァソン　房枝 (Ivarsson Fusae)		
研究協力者	麻　子軒 (MA Shiken)		

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	野村　涼 (NOMURA Ryo)		
研究協力者	劉　翔 (Liu Xiang)		
研究協力者	リンドソコグ　セバスティアン (Lindskog Sebastian)		
研究協力者	松田　結貴 (MATSUDA Yuuki)		
研究協力者	カミッレーリ　ガブリエレ (Camilleri Gabriele)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
役割語研究会	2019年～2021年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関